上智大学言語学会　第 29 回年次大会
午後の部シンポジウム講演要旨

タイトル：　Three-way case valuation system in Japanese

講　師：小林　ゆきの

要　旨：

日本語の格に関しては、これまでも広く議論されてきたが、その根本的な性質に関しては、未だ明らかにされていない。本講演では、日本語の格は Chomsky が提案しているような 2 通りの格付値、すなわち(i)語彙的な付値と(ii)一致（Agree）による付値、の 2 通りでは捉えられないことを論じ、一致とは独立した、外在化（externalization）される際の領域（domain）に依存する格付値のシステムを提案し、少なくとも３通りの格付値が日本語には存在すると主張する。

具体的には、ガ格とノ格は一致による付値だと統一的に捉えられないという考察をもとに（Kobayashi 2012, 2013）、形態部門における階層的な格付値システムを提案する（cf. Marantz 1991, Aoyagi 2006, Bobaljik 2008）。ここでは、格とは、統辞的要素（syntactic object）が外在化され線形化（linearization）される際に必然的に失われる統辞関係（syntactic relation）を、音声部門で解読可能な形で encode するものと仮定し（Kobayashi 2013）、相理論（phase theory）のもと、相単位で統辞部門から出力されるその相領域に依存する形で格の値が決定すると主張する。

この格付値システムを用いることで、従来では十分な説明がなされなかった幾つかのガノ交替現象、目的語繰り上げ構文、軽動詞構文が説明できることを見ていく。

【講師紹介】
小林　ゆきの（こばやし・ゆきの）
筑波技術大学講師。言語学博士。研究分野は理論言語学、統辞論（格交替現象、手話言語学）。論文に’’Anti-licensing theory of unmarked cases and ga/no conversion” (online proceedings of GLOW in Asia IX. 2013.)